

白銀の聖痕Ⅰ 『束の間の樂園』

【異形の嫁とらぶらぶえっち♡】

【赤ちゃんも生んじゃう♡】

【オルガエンジン】シリーズ

純愛・異種姦・異常受胎・出産・別離

本格ディストピア・ダークラブストーリー

著：XYZ_L



白銀の聖痕 1

『束の間の樂園』



女の子を生体ユニットにして使い潰しちゃう系

ディストピア・ハードSF・メカ・バトルモノ

『オルガ・コード』シリーズ

第一部:束の間の楽園

1.奈落の隣で

———聖暦2026年、秋。

世界の果てのような、忘れ去られた海域にその灯台はあった。

かつて行き交う船の道標であった石造りの塔は、今はもう役目を終え、風と波の音だけがその螺旋階段を吹き抜けていく。

カイは、その最上階の円形の部屋で、眠る女の寝顔を静かに見つめていた。

床に敷かれたありあわせの粗末な毛布。

そこに広がる、月明かりを浴びて白銀に輝く絹糸の髪。

規則正しく上下する、穏やかな肩のライン。

そして、半開きの潤んだ唇からこぼれる甘い寝息。

その姿だけを見れば、まるで戦いなど知らぬ無垢な少女が、ただ夢を見ているかのようだった。

しかし、カイは知っている。

彼女が纏う半透明のドレスの裾から、濡れた光沢を放つ数本の細い触手が、まるで淫らな夢を見るように微かに蠢いていることを。

そして、その穏やかな寝息を立てる唇がひとたび悦楽の歌を紡げば、巨大な軍隊さえも内側から狂い、自壊していくことを。



カイは部屋の中央で燃える焚き火に、乾いた流木をくべる。
ぱちりと火の粉が弾け、一瞬だけ彼女の顔を照らし出した。

イラストリアス。

俺の白銀の戦乙女。

（オーダーを抜け出し、俺は逃亡者となった。全ては彼女を救うため。いや……ただ、もう一度会いたかっただけなのかもしれない）

脳裏に焼き付いて離れない、1年余り前の記憶が蘇る。

移動基地船「ルミナス」を襲った、あの圧倒的な災厄。

聖女の姿をしながら、その歌声で仲間たちを狂わせていく、恐ろしくも美しい怪物。

そしてその数週間後、港町クロウベイで再会した、男たちを誘惑し、その精気を粘液まみれの触手で喰らう、冷徹なエコーズとしての彼女の姿。

あの港町で見失ってから1年以上。

地獄のような追跡の果てに、ようやくこの手に取り戻したのだ。

カイは自らの手のひらを見つめる。

油の染みついた、無骨な技術者の手。

この手は彼女の機体を整備し、戦場へと送り出すことしかできなかった。

彼女を救うことも、その苦しみに終わりを与えてやることもできない、無力な手だ。

(世界は、俺たちが知っていた頃とはまるで違う貌になってしまった)

彼は闇市場で手に入れた、古びた情報端末を起動する。

大戦の混乱で、今や情報は、金さえ払えばどんな裏ルートからでも手に入った。

そこに映し出されるのは、混沌を極める世界のニュースだ。

『……セラフィック・オーダーの統制は完全に崩壊。各地で信徒による内乱が頻発しており、かつての偉大なる神聖国家の面影はもはやありません……』

『……一方、世界統合連合もここ数ヶ月、各戦域で発生している所属不明機による奇襲攻撃について、旧オーダーの残党によるテロとの見方を強めています』

『しかし現場の兵士たちの間では、その神出鬼没の戦いぶりから、伝説の怪物『エコーズ』の一種ではないかという噂が広まっており、軍内部では『白い魔女』あるいは『奈落の亡霊』というコードネームで呼ばれ、士気に深刻な影響を与え始めている模様……』

カイは端末の電源を切った。

オーダーも連合も、あの地獄の後に、それぞれの形で崩壊へと向かっている。

そして今、その元凶である彼女は、俺の腕の中であどけない寝息を立てている。

（この束の間の平穏が永遠に続かないことなど、分かっている。彼女の内なる憎悪と本能が、いつこの楽園を破壊するかも）

彼は、眠るイラストリアスの頬にそっと触れようとして、その指を寸前で止めた。

触れてはいけない。

そう思った。

この陶器のように滑らかな肌の熱を知ってしまえば、もう後戻りはできない。

◇

その時だった。

彼女が、うっすらとその青緑の瞳を開けたのは。

「……カイ？」

その声は掠れ、どこか夢うつつの響きを帯びていた。

カイの心臓が大きく跳ねる。

彼女が眠りから覚める時、その瞳に宿す光が聖女のもののか、魔性のもののか。

カイはいつも息を詰めて、その瞬間を待った。

イラストリアスは、ゆっくりとそのしなやかな身体を起こした。

半透明のドレスが、はらりと肩から滑り落ちる。

月明かりと炎の揺れる光が、豊満な乳房の柔らかな丘を照らし出した。

それはかつてカイが焦がれた、光景そのものだった。

頂で淡い桜色に色づいた乳首が、夜気に触れてきゅっと硬く尖っている。

その様がカイの目に鮮烈に焼き付いた。

彼女は、ぼんやりとした様子で部屋の中を見回した。

燃える焚き火、石壁に揺れる自分の影、そして、固唾を飲んで自分を見つめる一人の男の姿。

「.....ああ、そうでしたわね。わたくしは.....あなたここに」

その蜂蜜色の唇からこぼれた言葉は、間違いなくカイが知るイラストリアスのものだった。

彼女はふわりと、聖女であった頃と何ら変わらない、母性的な微笑みを浮かべた。

カイの全身から、張り詰めていた糸がぷつりと切れる感覚がした。

「.....おはよう、イラ」

その愛称を口にするのに、どれほどの勇気が要っただろう。

彼はごくりと乾いた喉を鳴らしながら続けた。

「腹は減ってないか？ 昨日、近くの入り江で魚を獲ってきたんだが」

「まあ、本当ですか？ さすがですわね、カイ。貴方の手にかかればどんな場所でも、わたくしたちの食卓は豊かになる」

彼女は、くすくすと鈴を転がすように笑う。

その無邪気な姿は、オーダーにいた頃と少しも変わらない。

カイは安堵に胸を撫で下ろしながら、焚き火で炙っていた干し魚を、木の皿に乗せて彼女に差し出した。

「熱いから気をつけろ」

「ありがとう、カイ」

彼女は、その白い指で熱い魚の身を丁寧にはぐし、小さな口へと運んだ。

そのあまりにも穏やかで、ありふれた光景。

カイは、この時間が永遠に続けばいいと、心の底から願った。



だが彼は知っている。

この平穏が、いかに脆い砂上の楼閣であるかを。

イラストリアスは、魚を半分ほど食べ終わると、ふとその動きを止めた。

そして、どこか遠くを見るような目で、静かに呟いた。

「.....声が、聞こえますわ」

「え？」

「海のずっと深いところから。わたくしを呼ぶ姉妹たちの声が。飢えているのですわ、彼女たち.....わたくしを求めている」

その瞬間、彼女の瞳の青緑の光が、深淵の闇を映したかのように深みを増したのを、カイは見逃さなかった。

ドレスの裾で蠢いていた触手が、まるでその声に応答するかのように、ぴくりと一度だけ粘液質な音を立てて、大きく脈打った。

ぞわりと、カイの背筋を冷たいものが駆け上がった。

来たのだ。

彼女の中に眠る、もう一人の『誰か』が目を目まそうとしている。

「イラ、何を言って……」

「ああ、そしてあの鉄と油の匂いも。わたくしの身体を、魂を汚したあの者たちの匂い。とても、とても不愉快ですわ……」

彼女の表情から、聖女の微笑みが消えていく。

代わりに浮かび上がるのは、絶対零度の無機質な怒り。

カイは咄嗟に、彼女の肩を掴んでいた。

「イラ！ しっかりしろ！ 俺を見ろ！」

「……カイ？」

彼女の瞳が焦点を取り戻す。

そこには怯えと、混乱の色が浮かんでいた。

「わたくし……今、何を？」

「……疲れているんだ。少し横になれ」

カイは、彼女を毛布の上へと優しく導いた。

彼女はまるで幼子のように素直にそれに従い、再び横になる。

しかし、その瞳はもう眠りへと誘われることはなく、ただ不安げに揺れながら、焚き火の炎を見つめていた。

カイは何も言えなかった。

ただその傍らに座り、月光を吸って冷たく輝く銀色の髪を、震える指でそっと撫で続けることしかできなかった。

この聖と魔性が同居する美しき怪物の隣で、自分は一体いつまで正気でいられるのだろうか。

夜明けの光が石窓から差し込むまで、カイは、自らの無力さとすぐ隣にある甘く恐ろしい奈落の深さに、ただ打ち震えていた。

2.過去という名の亡霊

灯台での奇妙な平穏の日々が始まった。

昼間、カイは入り江で魚を獲り、塔の周りで食べられる野草を探した。

イラストリアスはそんな彼の後を、まるで初めて世界に触れる少女のようにおぼつかない足取りでついてきた。

彼女は岩場に咲く名も知らぬ小さな紫色の花を見つけては、その可憐さに息を呑み、波打ち際で貝殻を拾っては、その螺旋の造形に不思議そうに首を傾げた。

その姿はあまりにも無垢で、あまりにも美しかった。

カイは彼女のそんな笑顔を見るたびに、胸が締め付けられるような甘い痛みを覚えた。

この時間が永遠に続けばいい。

心の底からそう願った。



しかし、夜が訪れると亡霊は必ずやってくる。

その夜も二人は、燃える焚火を挟んで向かい合っていた。

イラストリアスは昼間摘んできた紫色の花を自らの銀色の髪に挿しながら、静かに口を開いた。

「カイ……わたくしたちは、いつまでこうしていられるのでしょうかね……」

その声には、彼女自身にも制御できない運命への諦観が滲んでいた。

カイは言葉に詰まった。

そしてふとした瞬間に、あの地獄の記憶が彼の脳裏を鮮烈に過るのだ。

移動基地船「ルミナス」を襲った、あの圧倒的な災厄。

まだオーダーの整備士だった俺は、倉庫エリアの冷たい金属の匂いが充満する薄暗がり、彼女と再会した。

死んだはずのイラストリアスと。

その姿はかつての戦乙女そのものだったが、その瞳は青緑の、人間ではない光を宿していた。

彼女の歌声が響いた瞬間、基地は地獄と化した。仲間たちが狂い、同士討ちを始め、セラフィム隊は壊滅した。

そして、俺は。

倉庫の冷たい床に、彼女に押し倒された。

抵抗などできなかった。華奢に見えるその身体のどこに、これほどの力があるのか。

その聖女の貌をした怪物は騎乗位で俺に跨ると、俺の肉体をそのエコーズの肉体で無慈悲に蹂躪した。

彼女のドレスの下から蠢き出す無数のぬらぬらとした触手が俺の四肢に絡みつき、その圧倒的な締め付けと脈動で、俺の自由を完全に奪い去った。

そして、その豊満な乳房を俺の胸に押し付けながら、ゆっくりと腰を沈めてきたのだ。

俺の恐怖と興奮で昂ぶった分身が、彼女の熱く濡れた肉の奥底へと飲み込まれていく。

だが、その感触は人のものではなかった。

まるで、底なしの奈落へと引きずり込まれるような感覚。

彼女のその美しい肉の内壁は、脈打つたびに俺の精気と生命の熱量を根こそぎ吸い上げていく。

脳髓を焼くような恐怖と、抗いがたい屈辱的な快楽。

その奔流の中で、俺は何度も何度も、魂の奥底まで搾り取られた。

意識が遠のく寸前、彼女は俺の耳元でこう囁いたのだ。

恍惚に濡れた声で。

「カイ……貴方はわたくしの仲間……」

あの地獄の後。

オーダーを抜け、彼女を追い続けた果てに、港町クロウベイで再び彼女を見つけた。

「イリス」と名乗り、男たちを誘惑し、その精気を喰らう冷徹なエコーズとして生きていた彼女はあの時、俺に自らを殺すためのナイフを手渡した。

だが、俺にはできなかった。

そして転機となった、あの戦い。

オーダーの聖女たちに追い詰められるイラストリアス。

その戦いの中に、俺が自らの命を顧みず割り込んだあの瞬間。

「やめろ！彼女は怪物なんかじゃない！」

怒りに任せて聖女の一人が、俺のボートへとミサイルを放った。

死を覚悟したその寸前。

信じられない速度で彼女の白い機体が俺の前に立ちはだかり、そのミサイルを自らの身体で受け止めたのだ。

爆炎が白い装甲を砕き、エコーズの青白い体液が血のように噴き出す。

凄まじい物理的ダメージを受けながらも、彼女は俺をその身を賭して守り抜いた。そして震える声でこう呟いたのだ。

「.....なぜ.....ですの.....？ なぜ、わたくしのような穢れた存在のために.....命を.....」

◇

「.....カイ？」

イラストリアスの不安げな声が、カイを暗い記憶の海から引き戻した。

彼ははっと顔を上げた。

目の前の彼女は、心配そうにこちらを覗き込んでいる。

（そうだ。あの時、確かに彼女の魂に触れたはずなんだ）

過去の彼女は確かに怪物だった。

俺の全てを奪った。

しかし今の彼女は、聖と魔性の間で必死に揺れ動いている。

ならば、俺にできることは一つしかない。

俺が彼女を信じなくて、誰が信じるというのだ。

カイは意を決して、イラストリアスに向かってその手をゆっくりと差し出した。

あの事件以来、初めて自らの意思で彼女に触れようとしていた。

イラストリアスの青緑の瞳が、驚きに見開かれる。

カイの指先が、彼女の花を握ったままの陶器のように冷たい指先にそっと触れた。

「.....イラ」

カイは言った。

「俺はここにいる。お前がお前でいられなくなりそうな時は、俺が何度でもお前の名前を呼んでやる。だから」

その瞬間、カイの言葉を遮るように、イラストリアスの瞳から大粒の涙が一筋こぼれ落ちた。

それは聖女の涙か、それとも怪物の涙か。カイには分からなかった。

ただその涙の熱さだけが、彼の指先にあまりにも生々しく伝わってきた。

その夜、カイは久しぶりに悪夢を見なかった。



翌朝、カイが目を覚ました時、隣に彼女の姿はなかった。

心臓が氷水で締め付けられるような感覚に襲われる。

まさか、また何も言わずに。

彼は錆びついたナイフを掴むと、慌てて灯台の外へと飛び出した。

朝靄のかかった岩場の海岸。

そこに彼女はいた。

半透明のドレスの裾を冷たい海水に濡らしながら、ただじっと水平線の彼方を見つめている。

「.....イラ」

カイが声をかけると、彼女はゆっくりと振り返った。

その表情は昨夜の少女のようなか弱さとも、エコーズとしての魔性の冷たさとも違う。

それはかつてカイが知る、あの白銀の戦乙女の気高く、そしてどこか物悲しい静かな表情だった。

「カイ。わたくし、夢を見ておりましたの」

「夢？」

「ええ。とても懐かしい夢ですわ。セラフィック・オーダーの聖堂で、あなたと初めて言葉を交わした日のことを」

彼女はふわりと微笑んだ。その笑みは昨夜のものとは違い、確かな意志の光を宿していた。

「あなたはあの頃と何も変わりませんのね。不器用で真っ直ぐで
.....そして誰よりも優しい」

カイは言葉に詰まった。

彼女は確かにあの頃の彼女だ。

しかしその瞳の奥に揺らめく青緑の光は、彼女がもはやただの人間
ではないことを雄弁に物語っていた。

「わたくしはもう、かつてのイラストリアスではありません」

彼女はまるでカイの心を見透かしたかのように続けた。

「この身はエコーズのもの。この魂は連合への憎悪に今も焼かれて
いる。.....ですが」

彼女はカイの方へと一步步み寄った。

そして昨日カイがしたのと同じように、その冷たい指でカイの油に
汚れた無骨な手にそっと触れた。

「ですがカイ。あなたがわたくしの名を呼んでくれる限り」

彼女はさすがのように、その両手でカイの無骨な手を大切に包み込む。

陶器のような冷たさの中に、微かな震えが伝わってきた。



「あなたがこの手を握っていてくれる限り」

朝の光を受けて煌めく青緑の瞳が、祈るように真っ直ぐにカイを見つめ上げる。

「わたくしはまだ……『イラストリアス』でいられる気がするのです」

その言葉は懇願であり、誓いであり、そしてあまりにもか細い希望の祈りだった。

カイはもう迷わなかった。

彼はその冷たい手を力強く握り返した。

「ああ。俺はここにいる。お前がお前であるために」

それ以上、二人の間に言葉は必要なかった。

ただ朝の光が、寄り添う二つの影を静かに照らし出していた。

それは地獄の中で生まれたあまりにも儚く、そしてあまりにも美しい楽園の始まりだった

作品名: 白銀の聖痕1『束の間の樂園』

発行日: 2026年5月5日

発行者: XYZ_L

連絡先: <https://bsky.app/profile/xyz0080.bsky.social>

【注意事項】

本作には強度の尊厳破壊、生体部品化、および救いのない結末などの過激な表現が含まれております。フィクションとしてお楽しみいただける方のみご閲覧ください。

【AI生成技術の利用について】

本作の表紙および挿絵などの画像は、AI画像生成技術を利用して出力したものをベースに、加筆修正やレイアウト調整を行って作成しております。

【禁止事項】

本作のテキスト、画像を含む一部または全部の無断転載、複製、改変、Web上への無断アップロード(SNS、動画サイト、ファイル共有サイト等を含む)を固く禁じます。
